

「教令」に関する解説

「教会の母」であるマリアの記念日について

ルルドでのおとめマリアの最初の出現から 160 年を記念する 2018 年 2 月 11 日付の「教令」をもって、教皇庁典礼秘跡省は、「教会の母聖マリア」の記念日を一般ローマ暦に加えるよう命じる教皇フランシスコの決定を履行する。「教令」には、ミサと時課の典礼とローマ殉教録のためのラテン語による典礼式文が添付されている。司教協議会は、必要な式文の翻訳を認可し、認証を受けた後、その管轄区域のために典礼書の中で発表する。

新しい祭儀については、「教令」の中で簡潔に説明されている。「教令」は、第 2 バチカン公会議の『教会憲章』第 8 章で説明されているように、「キリストと教会の神秘の中の」マリアの存在について理解が深まり、マリアに対する典礼による崇敬が最終的に成熟したことを思い起こしている。たしかに、1964 年 11 月 21 日にこの教義憲章が発布される際、福者教皇パウロ 6 世が、マリアに「教会の母」という称号を荘厳に与えることを望んだのには正当な理由があった。キリスト者の意識は、二つの千年期という歴史を通して、キリストの弟子たちをさまざまな方法で聖母と分かちがたく結び付ける最終的なきずなをはぐくんできた。福音記者ヨハネは、十字架上で亡くなるイエスについて記すとき、そのようなきずなについてはっきりとあかししている（ヨハネ 19・26-27 参照）。自らの母を弟子たちに与え、母を弟子たちに与え、「すべてのことが今や成し遂げられたのを知り」、死の間際のイエスは、神秘体である教会のいのちのために「息を引き取られた」。実に、「十字架の上に眠るキリストの脇腹から、このうえない秘跡である全教会が生まれた」（『典礼憲章』5 条）のである。

十字架上のイエスの心臓から流れた水と血は、イエスのあがないをもたらす奉獻の完全なしるしであり、洗礼と聖体を通して、教会に秘跡的にいのちを与え続けている。あがないの主とあがなわれた者とのこのすばらしい交わりは、つねにはぐくまれなければならない、この交わりのうちに、聖マリアはその母として果たすべき使命をもっている。このことは、ヨハネ福音書 19・25-31 で思い起こされ、この箇所は創世記第 3 章と使徒言行録第 1 章からの朗読とともに、すでに示された新しい記念日のミサのために推奨されている。これらの箇所は、1975 年のあがないの聖年を前にして 1973 年に典礼省によって認可された「教会の母聖マリア」という信心ミサに含まれている（*Notitiae* 1973, pp. 382-383 参照）。

このように、マリアが教会の母であることを典礼の中で記念することは、1975 年の『ローマ・ミサ典礼書』規範版第 2 版の信心ミサの中にすでに採用されている。そして、聖ヨハネ・パウロ 2 世の教皇在位中には、ロレトの連願に「教会の母」という称号を加える可能性が司教協議会に与えられた（*Notitiae* 1980, p. 159 参照）。また、マリア年に際して、典礼省は、『聖母マリアのミサ集（*Collectio missarum de Beata Maria Virgine*）』の中で、「教会の母であり象徴であるマリア」という表題で信心ミサのための他のミサの式文を発表した。何年か後には、ポーランドやアルゼンチンなどいくつかの国の固有の暦には、「教会の母」の祭儀を聖霊降臨後の月曜日に挿入することも認可された。その他の例として、福者パウロ 6 世がこの称号を告知した聖ペトロ大聖堂のような特別な場所や修道会や団体の固有暦の中にこの祭儀が加えられた。

五旬祭に聖霊を待ち望んでいたときから、地上を旅する教会に母としてたえず気遣ってきたマリアの霊的母性の神秘の意義をふまえて、教皇フランシスコは、聖霊降臨後の月曜日に、教会の母であるマリアの記念日が、ローマ典礼様式の全教会で義務として守られることを定めた。聖霊降臨の教会の活力と教会に向けられるマリアの母としての心遣いと結びつきは明らかである。ミサと聖務日課の式文中で、使徒言行録 1・12-14 は、世のあがない主であるわが子の十字架のもとで「すべてのいのちある者の母」となった「新しいエバ」の予型の観点から読まれる創世記 3・9-15、20 と同じように、典礼祭儀に光を投げかけている。

この祭儀が全教会に広がるようにという願いは、すべてのキリストの弟子に次のことを思い起こさせるであろう。すなわち、神の愛によって成長し満たされることを望むなら、わたしたちの生活を三つの偉大な現実、すなわち、十字架と聖体と神の母の上にしかりと据える必要があるということである。これらは、わたしたちの内的いのちを形づくり、実を結ばせ、聖化し、わたしたちをイエスへと導くために神からこの世界に与えられた三つの神秘である。この三つの神秘は、沈黙のうちに観想されなければならないのである (R. Sarah, *The Power of Silence*, n. 57 参照)。

典礼秘跡省長官 ロベール・サラ枢機卿